平成十一年三月

蟹江町歴史民俗資料館

年報

第十九冊

目次

一「沿革誌」より……1
二 事業概要……2
三 資料の収集・保管……3
四 展示……10
五 調査・研究……13
六 情報提供……15
七 教育普及……16
八 庶務報告……21
九 文化財保護……22

蟹江町歴史民俗資料館特別展

明治・大正・昭和の世相と郷土の文化人展

鈴木夢平画：号外　田中内閣現出

小酒井不木：花祭りというにモラトリアムという恐ろしきことあり
虎の子は　かへしてくれず　血の祭

小酒井不木　昭和２年浪越１２ヶ月（館蔵）から

期間：平成９年１１月１日（土）～１１月３０日（日）

場所：蟹江町歴史民俗資料館　企画展示室
蟹江町大字今字蟹江浦２３　蟹江町産業文化会館内

主催：蟹江町教育委員会・蟹江町歴史民俗資料館

特別展開催にあたって

当歴史民俗資料館では、年間に数回の特別展を開催しております。平成７年度は「戦後５０周年記念事業」として戦中を含めました６０年間の歩みを取り上げ、平成８年度につきましては、「近代蟹江の群像」と題して、明治時期以降、当町出身の探偵小説家・医学博士小酒井不木を始めとする各界に業績を残された方の資料を中心に展示を構成いたしました。

戦国、江戸期の特別展示も過去数回実施してきましたが、明治、大正及び昭和前期の世相を取り上げた機会はありませんでした。今回、前回に引き続きまして郷土が生んだ文化人とその関連資料とあわせて、その方々が活躍された時代を主題として「明治・大正・昭和（戦前）の世相と郷土の文化人」展を開催する次第であります。

当館では、平成６年度以来「郷土文化資料の購入事業」を推進し、郷土の文化に関する資料の収集に努めてまいりました。特に今年度は須成在住の後藤昌之様から小酒井不木及び後藤道政関係資料の寄贈もありまして、ますます当館の郷土文化資料も充実することとなりました。今回の特別展には後藤様から寄贈を受けました資料を始めとする文化資料を公開する所存であります。

また、青島新聞資料文庫、日本大正村資料館及び愛知医科大学には、特別展の趣旨を理解いただき、多大なる資料の提供と協力を賜りました。新聞資料には、事実の報道とともにその時代の人々の手の感触が伝わり、大正時代から昭和にかけての双六には、当時の人々の夢が感じさせられます。なりよりも科学的捜査を重視した探偵小説を書き上げ、医学博士として医学技術の向上に努めた小酒井不木所蔵資料には、彼の飽くなき学問的な欲求と豊富な知識の源泉が感じさせられ、各々全く関連のない資料でありますが、一つの時代のエネルギーが展示室をとおして伝わってくるような気がします。

今回、蟹江町に関する資料は、明治の文書資料の他は写真のみの展示で行いました。文字離れの時代ですので、写真をとおして当町の歴史を理解していただきたいと存じます。

なお、特別展開催にあたり前述の機関の他、資料及び情報の提供をいただき、また写真撮影などの協力を賜った方々に対しまして、ここに厚く御礼申し上げます。

平成９年１１月　　蟹江町歴史民俗資料館

１ 人物解説

小酒井不木

医学博士　探偵小説家

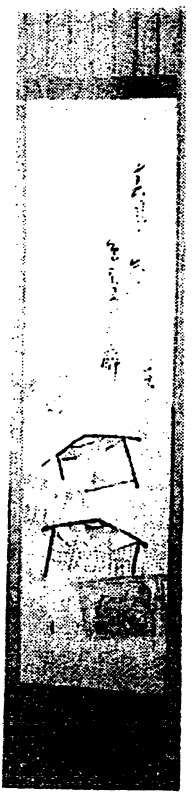
明治２３年１０月８日生まれ、新蟹江村（蟹江新田）出身。父は新蟹江村村長小酒井半兵衛。県立一中・京都三高を経て大正３年東京帝大医学部卒業。以後医学についての研究を続け、海外留学を経て英国ロンドンに在った時、喀血、大正９年東北大学教授も発令だけで赴任にはいたらず、大正１０年以後は病勢一進一退を続けたが、その後大正１２年に名古屋に居を移し、文筆活動に入るにいたった。

ロンドン留学中、コナンドイルの作品に接して以後豊富な医学知識と推理によるいくつかの条件設定のもと、いわゆる探偵小説に卓抜した筆のさえをみせ、『疑問の黒枠』『紅色ダイヤ』などの作品を発表、多くの大人は勿論、少年雑誌を通して少年たちにもその読者層をもつにいたった。結核との戦いを体験し、医者として、患者の立場として執筆した『闘病術』は、当時の世相を反映し、ベストセラーとなった。

また、江戸川乱歩の処女作『二銭銅貨』を絶賛、乱歩の文筆活動への援助など、探偵小説家を目指す後輩の育成などにも貢献したことでも知られている。

俳句にも情熱を注ぎ、拈華俳句会の発起人として、会の名付け親（仏教用語で以心伝心）としても有名。

昭和４年３月２７日風邪気味にて発熱就床。同年４月１日急性肺炎併発、惜しまれて逝去した。３９才。



小酒井不木　掛軸　画賛
「春風や朱の鳥居にすがる酔」

地域文化財講座

「明治・大正・昭和の世相と小酒井不木」―要約―

日時：平成九年十一月三十日午後一時三十分
会場：蟹江町産業文化会館　会議室
解説：蟹江町歴史民俗資料館　伊藤和孝

本日は皆様にはお忙しいところ当講座にご出席いただきまして誠にありがとうございます。

本年度地域文化財講座第一回目の担当としまして私が、今回実施しております特別展「明治・大正・昭和の世相と郷土の文化人」の題にあわせまして、展示を補足するかたちで解説を行いたいと存じます。

この場合講演会または講師と称し、研究の発表を行うことが普通ですが、せっかくここに足を運んでいただきました皆様には、誠に申し訳けございませんが、何分研究不足の感が否めませんので、不十分な内容になるとは存じますがご了解賜りますようお願い申しあげます。

先日来より金融関係の不祥事が連日報道されているわけでございますが、実はこの様な現象は明治以来、過去何度も繰り返しているのでございます。

特に昭和二年の金融全般にわたります恐慌(1)は、銀行が次々と破綻し、鈴木商店の倒産を始めとする商社にまで不況が拡大、各地で雇用不安を原因とする労働争議が頻発し社会不安となり、これに対して政争に明け暮れ、何一つ有効的な政策を打ち出せず、明治の民権活動、大正の護憲活動など多くの人々の努力により大正時代から続きました政党政治に対して、人々は拭いきれない不信感をもった契機として有名であります。昭和二年の一年間の出来事は、展示室内の小酒井不木画帖で表現されていますのでぜひごらんください。

この後政党政治は、昭和五年浜口首相刺殺事件、昭和七年に発生した五・一五事件の犬養首相暗殺などにより崩壊し、軍部主導の軍国政治及び今までの自由経済から国家及び大資本による市場統制経済へと徐々に移行して